

学生時代の思い出      昭和 46 年卒      石坂 重昭

こんな不思議な試験がありました。

教養課程の物理学の試験で春日教授が今日の試験の問題はベクトル問題でと、黒板に二つのベクトルを縦と横に記載され、縦、横のベクトルの長さが同じではいけないので、縦を長くしたり、横を長くしたりと教壇の周りをグルグル回り考えをめぐらせていました。私は最前列に座っていたので、問題作成の過程をじつくりと見ていました。30 分が過ぎ、そろそろ問題が完成するかと期待していましたが、ドアの傍で顔をドアに向けて立つ教授はかなり悩んでいる状態で、まさか教授室に戻りもう一度考え直しかと思われて不気味な気持ちになったところで 1 時間経ちました。期末試験時間は 90 分ですから、時間内に問題は作成出来ないのではないかと不安感が沸いてきました。全体の同級生を見渡すとほとんど黒板を見ず、寝ている者や下を向いて別のことを考えているように見えました。ほとんどの人は問題の作成段階は聞いていなくても問題が出来れば、その時だけ聞けば良いということのようです。1 時間 10 分になり、教授が二つのベクトルの和のベクトル線を描き、「これは答えだ」と言いすぐに消し出したのです。エー答えまで書いてしまうのですか、70 分もかけて問題を作成した挙句に、答えまで書いてしまうと、全員 100 点満点でしょう。ひょつとしたら試験時間内に問題を作成すれば、過って答えを書いてしまうことにより、全員を合格させる方法だったのかもしれない。その後、物理学試験の成績が教室の前に張り出されました。100 点は私を含め 2 名だけでした。

教訓 人の話は最後まできちんと聞くと良いことがあります。